

なんかいめかの おかあさんのこえに

「はつとして」 しゅんは、おきました。

ねむいめをこすりながら はしっていきました。

「きょうこそは おくれないで みんなとラジオたいそうをしよう。」
ところが とちゅうで石ころにつまづき ころんでしまいました。
ひざには、ちがあかくにじんでいました。

しゅんは、がまんできず 家にかえり、おかあさんに
てあてを してもらいました。

ほうたいを まきおわったところに りょうくん
たちが家によってくれました。みんなは さんか
カードをくびにさげたり、手にもったりして たの
しそうに おしゃべりをしていました。

「しゅんくん、そのけがは どうしたんだい。」
みんなが しんぱいそうなかおをして言いました。
しかし、しゅんは、下をむいているだけでした。

(永井 行男)





ラジオたいそう

なつやすみにはいつて、一しゅうかんがすぎました。ことしも、ラジオたいそうが ちかくのこうえんでおこなわれています。

「しゅん、はやく おきなさい。りょうくんが むかえにきてくれたよ。」

四ねんせいのおねえさんが言いました。

「もうすこし ねていたいよ。」

と言って、よるおそくまで テレビをみていた しゅんはおきられません。

ラジオたいそうのじかんが ちかづいてきました。

「りょうくんが まっていますよ。きのうも またせたでしょ。はやくしなさい。」

とおかあさんがまくらもとで言いました。

りょうくんは、きょうも おくれそうなので いそいではしっていきました。

あそんでいるうちに、ふたりはおもしろくてむちゅうになりました。

あゆみさんもしげるくんも、パズルはけっこうとくいです。かんたんなふねのえなので、すぐできるとおもっていました。

ところが、どうしてもできません。たりないところがいくつもあるのです。ふたりで、たりないパズルのピースをさがしてみました。はこの中にも、いすの下にも見あたりません。そういえば、さっき見た本もずいぶんやぶれていたし、ちよつときたなかったようです。

「あーあ。」
と、しげるくんがためいきをつきました。あゆみさんも「あーあ。」と
いいたくなりました。



たりないパズル



あゆみさんは、学校からかえるとすぐしゆくだいをすませて、おとうとのしげるくんといっしよに、はいしやさんへいきました。きょう、はじめていくはいしやさんです。

まちあいしつには、え本やパズルがたくさんありました。あゆみさんは、さっそく本をよもうとしましたが、ばらばらにおいてあるので、おもしろそうな本がなかみつきありませんでした。そこへ、しげるくんが、パズルの入っているはこをもつてきました。

「おねえちゃん、いっしよにパズルをしようよ。」

よし子は、石山さんにはや足で近づきました。

よし子は、そっとかさをさし出し、

「どうぞ、入ってください。」

と、言おうとしましたが、どうしても声が出ませんでした。

雨は、少しずつ強くなってきました。

よし子はことばをかけられないまま、石山さんの後ろを歩いて行きました。

その時です。よし子の後ろから歩いてきた中学生が、

「どうぞ、わたしのかさに入ってください。」

と言って、石山さんの頭の上にかさを持っていきました。

「どうもありがとう。でも、わたしといっしょに歩いて行って、学校におくれないかしら。」

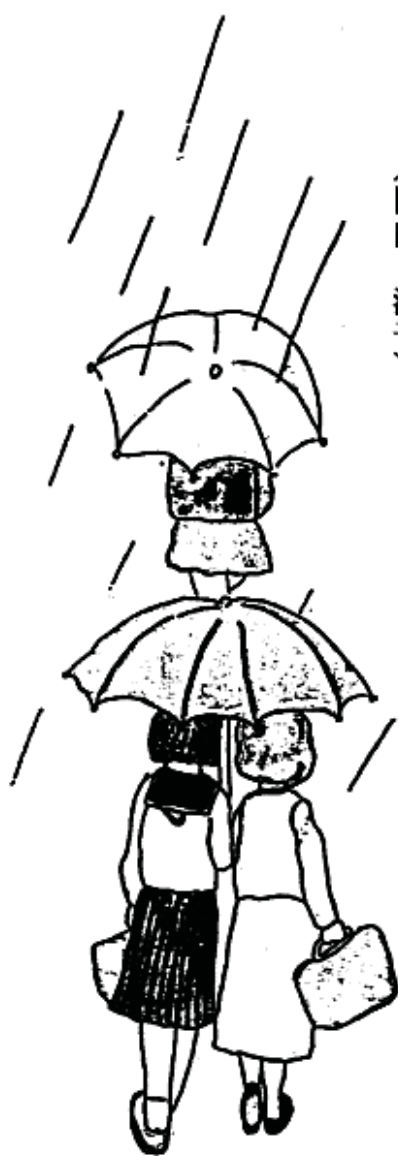
「ええ、だいじょうぶです。」

二人は明るい声で話しながら、一つのかさにかたをならべて歩き出しました。

よし子は石山さんたちをおいこし、はや足で学校へむかいました。

よし子のかさにおちる雨の音がしだいに大きくなっていきました。

(岡田 洋子)



朝のできごと

「行ってまいります。」

よし子は、赤いランドセルをおどらせながら、いきおいよくげんかんをとび出しました。

少し歩いて大通りに出た時です。急にポツポツと雨がふり出してきました。

よし子はかさを取りに家までもどりました。

「やっばり、かさを取りにもどってよかった。バスからおりた人たちもかさをさしているし。」

そう思いながら、よし子があたりを見まわしたときです。

よし子の目にかさをささないで歩いている女の人のすがたがとびこみました。

「あら、石山さんだわ。かさをささないでどうしたのかしら。」

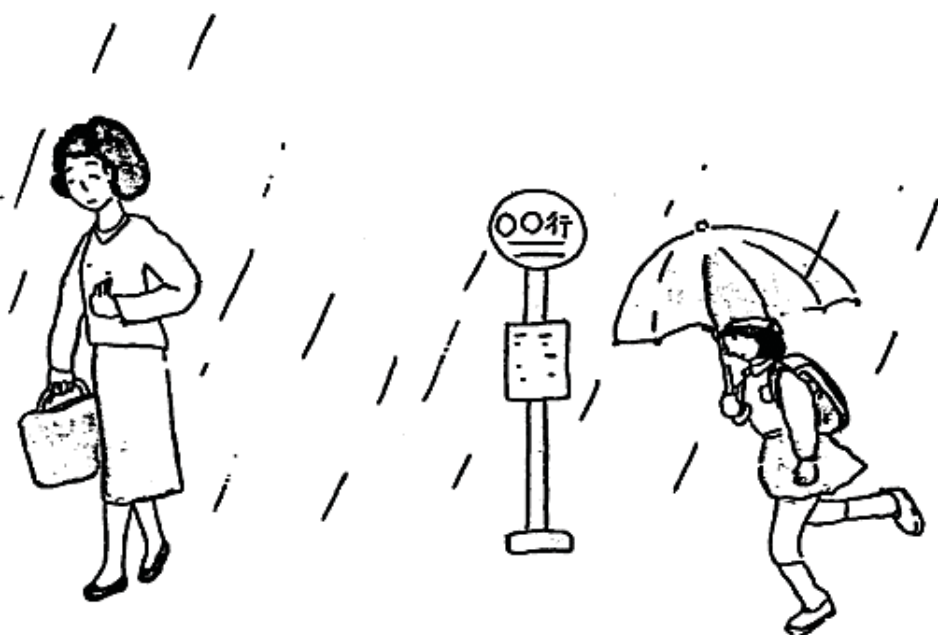
石山さんは、毎朝、よし子の家の近くでバスをおります。そして、そこから三百メートルくらい先にあるようふくを作る工場まで歩いて行きます。

石山さんは、左手と左足が不自由です。でも、いっしょうけんめいにどりよくして、いろいろなようふくが作れるようになったのです。

よし子のお母さんは、石山さんのことを

「体が不自由でも本当にどりよくしている人なのよ。」

と、言っていました。



「お父さんの小さいころは、どこにでもホタルはいたんだよ。よくうちわを持つて、「ホー、ホー、ホー、ホー、ホー、ホー、ホー、ホー」と歌いながら、ホタルを呼んだものだよ。今はずいぶん少なくなつたね。」

と、なつかしそうな言ひました。その話を聞いていた広せさんが、

「そうですね。ほんとは、二十年前と比べるとホタルの見られる場所がだいぶへりましたね。水がよごれてきていることも大きな原因でしょう。今、こんな

ね。」

と、さびしそうに言ひました。そのときです。お父さんが、

「ホタルだよ。」

と言ひました。よく見ると、ピカピカ、ピカピカと小さな光が見えました。その光に答えるように、またピカピカ、ピカピカとホタルがとんできました。小川の岸やいねの間で光っているホタルもいます。

「あつ、こんなところに。」

足元の草むらで光っているホタルを見つけてきました。

わたしは、そのホタルを手にとつてみました。小さなおしりを光らせて、手のひらを動き回つています。わたしは、そのホタルをそつと草むらにもどしてあげました。ホタルは草の葉を上つていきましたかと思つた。わたしは、そのホタルをいつまでも見ていました。

（平澤 浩子）



ホタルの里

岩間町には、自然かんさつ会があります。わたしは、その活動の中にホタルの
かんさつ会があることをお父さんから聞きました。わたしは、その活動の中にホタルの
にわたしたは、ホタルを見たことがないので、お父さんに連れて行ってもらうこと
にしました。

かんさつ会の日、うきうきしながら、虫取りあみと虫かごを持って出かけまし
た。集合場所には、もう何人かが集まっていました。暗くなるのを待って、自然
公園しどう員の広せさんから、ホタルについて説明を聞きました。
「今とんでいるのは、ゲンジボタルです。このホタルのよう虫は、カワニナとい
うまき貝を食べます。ホタルのよう虫やカワニナは、きれいな水でないと育つ
ことができません。よう虫は土の中にもぐってどろだんごのまゆを作ってさな
ぎになるので、川岸がコンクリートのかべになってしま
います。また、成虫になってもえさは取らないので、命は短いのです。その短い
間にオスメスが出会い、水辺のこけにたまごを産みます。このたまごが、来
年またみなさんを楽しませてくれるのです。」
広せさんは、スライドを使って分かりやすく説明してくれました。わたしは、
初めて分かったことがたくさんありました。

「それでは、ホタルを見に行きましょう。」
「たんぼのあぜ道を歩いて行くとかエルがグア、グア、グアとにぎやかに鳴いて
います。歩きながら、お父さんが、

と、体育係が提案した。学級のみんなは、

「サッカーやバスケットをして遊びたいよ。」

「練習をしようと言っても全員集まれないよ。」

と言つて、賛成する意見は少なかった。洋美たちも賛成はしなかった。

直也は、うつむいたまま聞いていた。

知子はだまって聞いていたが、

「せっかく学級全員でやるチーム・ジャンプなんだから、みんなで力を

合わせてがんばろうよ。」

と、思いきつて発言した。さらに、直也が公園で一先けんめい練習して

いたことも、みんなにくわしく話をした。

どちらかというところ、ふだんおとなしい知子が、みんなの前で堂々と意

見を言ったことに、洋美はおどろいた。

学級は静かになった。しばらくして、

「チーム・ジャンプは、練習した分だけとべる回数が増えるんだよ。」

「なわとび大会までには、まだ時間があるよ。」

たくさんの意見が出されて、練習をやらうということになった。

直也はみんなの意見を聞いて、ううに、がんばって練習を続けよう

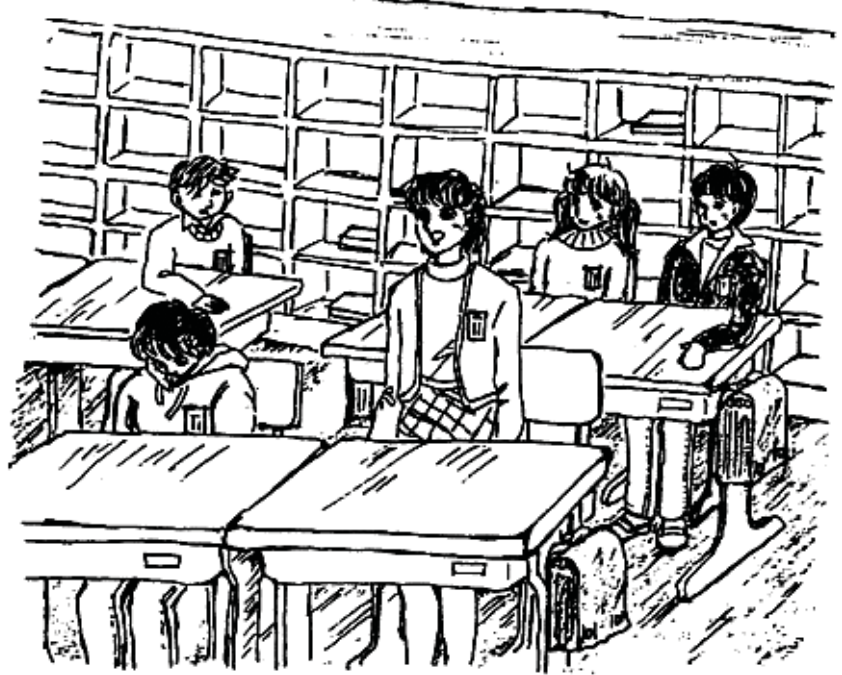
と思つた。

「帰りの会の最後に、
「みんなので、できるところまでがんばりましょう。」
と、先生がはげましてくれた。」

次の日の休み時間、体育係を中心にしてチーム・ジャンプの練習が始まった。直也のわきになわとびのじょうずな友達がついて、くり返しくり返すとぶタイミングを練習した。また、みんながアイデアを出し合つて、それぞれのとぶ位置や方向、長なわを回す速さを決めていった。そして、大会前日まで、学級全員による練習を続けた。直也は、少しずつ少ずつとぶタイミングを覚えていった。

校内なわとび大会の日をむかえた。いよいよチーム・ジャンプになった。みんなではげましの言葉をかけ合い

「いーち、にーい、さーん、……」
みんなの心が一つになつて、大きなかけ声が校庭いっぱいひびきわたった。



木枯らしがふき始めるころになると、毎年恒例の校内なわとび大会が近づいてくる。各学級では、なわとび大会についての話題が多くなり、休み時間には熱心な練習が始まる。この大会は、各種目ごとに級判定を行う個人競技と学級対抗のチーム・ジャンプとに分かれている。チーム・ジャンプは、一分間でどれだけ多くとぶかをきそう種目である。

直也は、この季節になると気が重くなる。それというのも、なわとびが大の苦手で、長くとべないからだ。特に、チーム・ジャンプとなると、いつも足に長なわがかかって、みんなにめいわくをかけてしまう。

「直也君がいたんじや、まず優勝はむりね。」
 「そんなこと言ったら、直也君がかわいそうよ。」
 洋美たちの会話が聞こえてきた。

家に帰ってから直也は、公園でなわとびの練習をしようとして心に決めた。そこで、となりの学級で仲良しの健太に協力を求めた。

公園に着くと、長なわのかた方を鉄ぼうにしぼりつけて、健太に回してもらいながら、チーム・ジャンプの練習をした。一、二回はとべたが、どうしても長なわが足にかかってしまう。健太にはげまされて何回も練習をくり返した。けれども、うまくとべるようにはならなかった。

あせだくになつて練習する直也たちのすがたを、同じ班の知子が、おつかいの帰り道にくう然見かけた。

体育の時間でもなわとびの練習が始まり、チーム・ジャンプの練習が行われるようになった。直也は「おなかがいい」と言つて、体育を休もうと考えた。しかし、友達に何か言われはしないかと思うと、それもできなかった。練習が始まると、やはり、直也の足に長なわが引っかけたり、二、三回で止まってしまった。

「直也君に長なわを回してもらおうよ。」
 なわとびのじょうずな洋美の声が聞こえた。しかし、長なわを回す役は、背が高い明と広に決まっていたので、それはできなかつた。直也は、にげ出したくなる思いでいっぱいだった。

体育の時間が終わつて、直也が教室に入ろうとしたとき、何人かの友達が、
 「気にするなよ。」
 と言つて、かたをたたいてくれた。

その日の帰りの会で、
 「休み時間に、みんなでチーム・ジャンプの練習をしよう。」



弟といっしょだとききままでのゆううつな気持ちも晴れてきた。
なれないことなので、なかなかうまくいかない。

「痛い。」

「明がつぜんの弟の声にびつくりした。明が布の赤い糸をさみで指を切りつけた。白布の母が仕事から帰ってきた。母は、すくなく、弟の手当をききと話をした。母は、すくなく、弟の手当をききと話をした。母は、すくなく、弟の手当をききと話をした。」

「広。あなたは、だいじょうぶだよ、うるさいなってお母さんにいったでしょう。それなのに、こんなことになって——。もし、明がもっと大きなけがでもしたらどうするつもりなの。」

ときつく母からいわれて、広は、だまっとうなだれていた。
夜おそく帰ってきた父からも、

「お母さんがあれほどいっていたじゃないか。広には、まったくがっかりしたよ。」
とひどくしかられた。

次の日の朝、父は、いつものように朝早く仕事へ出かけていたが、ランドセルの上にはきれいにぬいあがった雑巾と手紙がのせてあった。そこには、

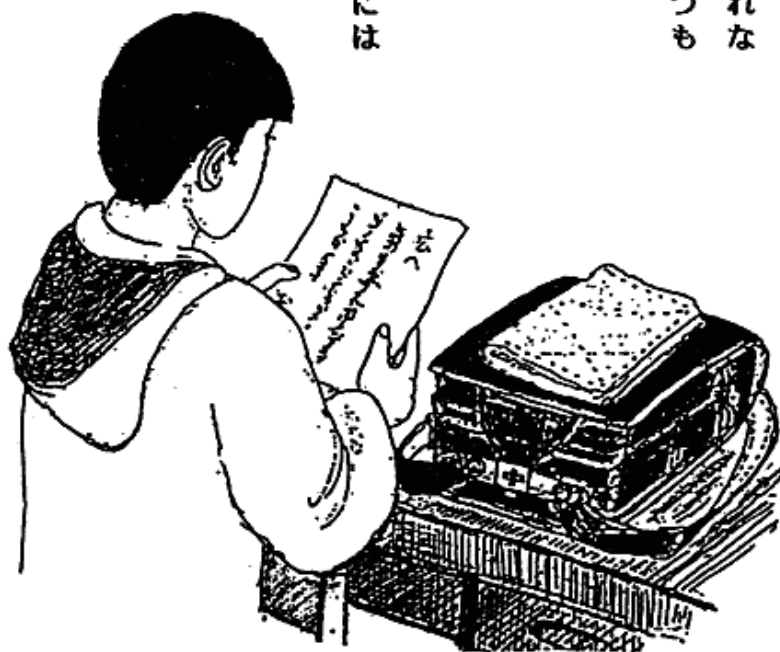
広へ

雑巾はお母さんが用意してくれたよ。昨日は、きつくしなかったけれど、これからも明のことを見てください。お父さんもお母さんも助かっているんだ。

お父さんより

と書いてあった。
広は、父の言葉を何度も何度も、くりかえし読んだ。そして、

（村木 聖一）



雑巾

楽しかった冬休みもあつという間に過ぎようとしていた。その時、始業式に持っていく物の中に、雑巾一枚という文字が目飛び込んできた。その時、始業式に持っていく

「明。雑巾作って話したか。」

「ううん。お兄ちゃんは。」

「話してないよ。どうしよう。」

二学期最後の学校からの「たより」を両親も見ているはずであるが、暮れから正月にかけての、親も仕事で忘れてかかっているのかもしれない。家には兄弟二人だけである。二人は、家中をさがしたが、やはり雑巾はなかった。

「お兄ちゃんどうしよう。」

「どうしようたって——。」

広は、昨日の夜のことを思い出した。弟と夢中になって、ゲームをしているときに、

「いつまでゲームばかりやっているの。あさっては、学校なのよ。宿題や持ち物はだいたいと母に注意された。」

と母に注意された。

「だいじょうぶだよ。うるさいな。」

「本当にだいじょうぶなんでしょうね。明もまねするんだから、広がしっかりしてよ。」

「わかっているよ。ちゃんとやるから。」

「そこで、適当なタオルを見つけて、自分で作ることにした。」

「お兄ちゃん、ぼくにもやらせて。」

「ああ、いいよ。」

